宇土城跡（城山）

宇土城跡（城山）調査概報(II)

宇土市埋蔵文化財調査報告書第７集

1982

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（城山）

宇土城跡（城山）調査概報(II)

宇土市埋蔵文化財調査報告書第７集

１９８２

熊本県宇土市教育委員会

序　　文

宇土城跡（城山）の調査も２年目を終え、幻の城と呼ばれていた宇土城の様相も次第に明らかになってまいりました。特に、本年度は、広範囲に石垣を確認し、本丸縄張を知る手がかりを得ることが出来ました。

また、旧宇土城の史跡整備も一部着工しており、新旧二つの城跡の公園化が、歴史の流れを、自らの体で学べる場となれば、望外のしあわせです。

今回の調査は、国庫補助を受け、教育委員会が主体となり実施し、無事終了することが出来ました。これも調査に御協力された方々の賜物です。

ここに心からお礼を申し上げます。

昭和57年３月

宇土市教育委員会

教育長　船　田　　至

例　　言

1．本書は、宇土市教育委員会が昭和56年度の国庫補助事業として行なった宇土市古城町所在の宇土城跡（城山）の発掘調査概報（II）である。
2．本書は昭和56年度調査の遺構編であり、出土遺物については、本報告に譲る。
3．本書に掲載の計測値は、方位は磁北、傾斜角は検出面が短いので直線と仮定した値である。使用記号　▲・◪は確認出隅・入隅、△・◪は未確認出隅・入隅である。
4．本書掲載の空中写真は、東洋航空事業株式会社の提供による。
5．本書に使用した石垣の図面作成は、東洋航空事業（株）に委託した。
6．本書の執筆及び編集は、平山修一、高木恭二の助言を得て木下洋介が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ 序 説…… 1

1. はじめに…… 1

2. 調査の組織…… 1

3. 発掘調査の経過…… 2

Ⅱ 本丸跡の調査概要…… 5

1. 本丸東側腰曲輪の調査…… 5

2. A－T 8′の調査…… 5

3. A－T11の調査…… 6

Ⅲ 内堀跡の調査概要…… 8

1. B－T 4の調査…… 8

2. B－T 5の調査…… 9

3. B－T 6の調査…… 9

4. B－T 7の調査…… 10

5. B－T 7′の調査…… 11

6. B－T 8、B－T 9の調査…… 11

Ⅳ おわりに…… 12

挿　図　目　次

Fig 1　宇土城跡（城山）位置図（1／50,000）…… 3
Fig 2　宇土城跡（城山）地形測量図（1／2,500）…… 折込み 1
Fig 3　トレンチ及び遺構配置図（1／1,000）…… 折込み 2
Fig 4　A－T 8'検出建物跡実測図（1／100）…… 折込み 3
Fig 5　A－T11検出排水溝実測図（1／100）…… 7
Fig 6　石垣配置図（1／2,000）…… 8
Fig 7　B－T 4石垣実測図（1／50）…… 折込み 4
Fig 8　B－T 5石垣実測図（1／50）…… 折込み 5
Fig 9　B－T 6石垣実測図（1／50）…… 折込み 6
Fig10　B－T 7石垣実測図（1／50）…… 折込み 7
Fig11　熊本城不開門平面図（1／200）…… 12

図　版　目　次

PL 1　宇土城跡（城山）と周辺空中写真
PL 2　宇土城跡（城山）空中写真
PL 3　宇土城跡（城山）本丸空中写真
PL 4（上）　本丸東側腰曲輪（南西から）
（下）　本丸東側腰曲輪（北から）
PL 5（上）　A－T 8'検出建物跡（北から）
（下）　A－T 8'検出建物跡（南から）
PL 6（上）　A－T 8'検出建物跡（西から）
（下）　A－T 8'検出建物跡SA－4（北東から）
PL 7（上）　A－T 8'検出建物跡側溝（南から）
（下）　A－T 8'検出建物跡礎石（北から）
PL 8（上）　A－T11遺構全景（東から）
（下）　A－T11検出排水溝（東から）
PL 9（上）　A－T11中央部分（東から）
（下）　A－T11東コーナ部分（北から）
PL10（右）　A－T11西側敷石の状態（西から）

	(左)	A－T11橋状施設（東から）
PL11	(右)	B－T4石垣（東から）
	(左上)	B－T4石垣（南東から）
	(左下)	B－T4石垣（南から）
PL12	(右)	出隅（▲F）出土状態（南東から）
	(左上)	B－T5－b石垣（南から）
	(左下)	B－T5－a石垣（東から）
PL13	(右)	B－T5－b石垣（東から）
	(左)	入隅（◤G）出土状態（南から）
PL14	(上)	出隅（▲A）出土状態（水面下：北東から）
	(下)	B－T6－b石垣（北東から）
PL15	(上)	入隅（◤B）出土状態（北から）
	(中)	B－T6－c石垣（北から）
	(下)	出隅（▲C）出土状態（北東から）
PL16	(上)	B－T6－b、d石垣出土状態（南東から）
	(下)	B－T6－d石垣（北から）
PL17	(右)	B－T6－d石垣（北から）
	(左上)	B－T6－d石垣北側部分（東から）
	(左下)	B－T6－d石垣南側部分（北東から）
PL18	(上)	入隅（◤D）出土状態（北東から）
	(下)	B－T6－e石垣（北から）
PL19	(右)	B－T7－a石垣調査前（西から）
	(左)	B－T7－a石垣出土状態（西から）
PL20	(右)	B－T7－a石垣（北から）
	(左)	B－T7－a石垣（南西から）
PL21	(上)	B－T7－a石垣近景（西から）
	(下)	入隅（◤J）出土状態（南西から）
PL22	(右)	B－T7－b石垣（西から）
	(左)	出隅（▲K）出土状態（西から）
PL23	(右)	B－T7′石垣（東から）

Ⅰ 序　　説

1．はじめに

宇土城跡（城山）は、熊本県宇土市古城町・神馬町に所在する近世初頭の城郭である。

城跡は、市街地の南西端に位置しており、史跡を利用した公園化の計画がなされた。昭和54年7月に公園整備事業が認可されたため、教育委員会では、工事に先立つ事前の確認調査を5ヶ年計画で、昭和55年度から実施している。今回の調査は、継続事業の2年目に当たり、本丸跡の調査は、昭和53年度に行なった調査を含め第3次になる。

発掘調査は、国庫補助を受け、昭和56年6月15日から11月30日まで実施した。

今回の調査は、昨年の調査で新旧二時期の城郭遺構の存在を確認しており、さらに、下層には、弥生、古墳、中世の各時代の遺物包含層も在るが、調査後も、保存が可能なため、最も新しい遺構の調査にとどめた。調査は、本丸2ヶ所、内堀7ヶ所の調査区を設定し、発掘を行なった。

調査期間

本丸　A－T8′、A－T11　昭和56年6月15日～9月8日

内堀　B－T4～B－T9　昭和56年9月9日～11月30日

調査には、多方面より協力を得、無事に終えることができた。機材の搬出入には、中村コンサルタント、市役所土木課の手をわずらわせた。特に、猛暑の中の作業や水につかっての作業にも協力的であった地元作業員の方々をはじめ、調査関係者に対し心から感謝の意を表したい。

2．調査の組織（昭和56年度）

調査主体	宇土市教育委員会
教育長	船田　至
社会教育課長	山村　茂
文化係長	一　宗雄
事務担当	内田憲子　高木恭二
調査担当	平山修一　木下洋介
調査指導	富樫卯三郎（前肥後考古学会会長）
	井上　正（前宇土市文化財専門委員長）
	椎葉昌美（熊本県立宇土高等学校教諭）
	大田幸博（熊本県教育委員会文化課技師）
調査協力	山羽シマ子　上野ナツエ　宮田ハルエ
	村田イネ　荒川昭子　飯田ミ子

杉本エミ子　橋本順子　飯田富子
井上頼子（地元作業員）
山神孝弘　内田哲朗　宮川栄助
宮本恵吾　谷口　茂（熊本商科大学学生）
古城史雄　松尾法博　渡辺千恵
平井利枝　武内由起子（熊本大学学生）
沢宮　優　橋本重信　元松茂樹
山本　弥　森下浩行　津志田幸紀
守田賢一　木村洋一　上塚智子
山口美和　平島雅子　中山みゆき
高木亮子　北原　恵（熊本県立宇土高等学校社会部部員）
勢田広行（文化財保存計画協会研究員）
安達武敏（宇土城三の丸跡調査団調査主任）
河北　毅（宇土城三の丸跡調査団調査員）
中村コンサルタント
鏡建設
東洋航空事業株式会社
宇土市役所都市計画課・土木課　（敬称略）

3．発掘調査の経過（抜粋）

6・15　現場事務所の設置。
16　機材搬入。
18　本丸東側腰曲輪の草刈り。
本丸東側腰曲輪の写真撮影。
23　A－T8東側のブリッジ状に残る部分の拡張（A－T8′）。
7・6　A－T8′で石垣と排水溝を検出する。
9　遺構の清掃と写真撮影を行なう。
13　A－T11周辺の草刈り。
15　A－T11（8×2m）を設定する。
21　発掘区を南へ拡張する。
24　石組の排水溝を検出。
8・10　A－T8′実測（高校生合宿～14日）。
18　A－T11検出の石組排水溝の実測をはじめる。
19　石組溝に使用された石臼出土。
20　石組溝の東コーナーを検出。
21　コーナー部より灰釉出土。
26　遺構の清掃と写真撮影。
9・1　各調査区の実測（～8日）
9　ユンボを使用し石垣の確認をはじめる。
10　B－T4で東西方向の石垣を確認。
16　B－T5で出隅（▲F）を確認。
17　さらに西側で入隅（◣G）を確認。
22　B－T6の調査をはじめる。

24　出隅（▲C）、入隅（◣B）を確認。

28　さらに北側の出隅（▲A）を確認。

29　南側に入隅（◣D）を確認。

30　B－T７の調査を開始し、入隅（◣J）を確認。

10・1　西側に出隅（▲K）を確認。

2　B－T７石垣を水面まで掘り下げる。（～20日）

21　B－T７石垣を確認。

9月22日～10月22日の間、出土した石垣の清掃と写真撮影を行なう。

11・11　機材撤去

18　ステレオカメラ撮影のために排土を除去する。（～28日）

24　ステレオカメラ撮影準備。

28　各石垣の撮影を行なう。（～30日）

以後３月まで補足調査、遺物整理、報告書の作成を行なう。

11・30　文化財学級で現場見学会を行なう。

2・15　広報紙に、調査の成果を掲載する。

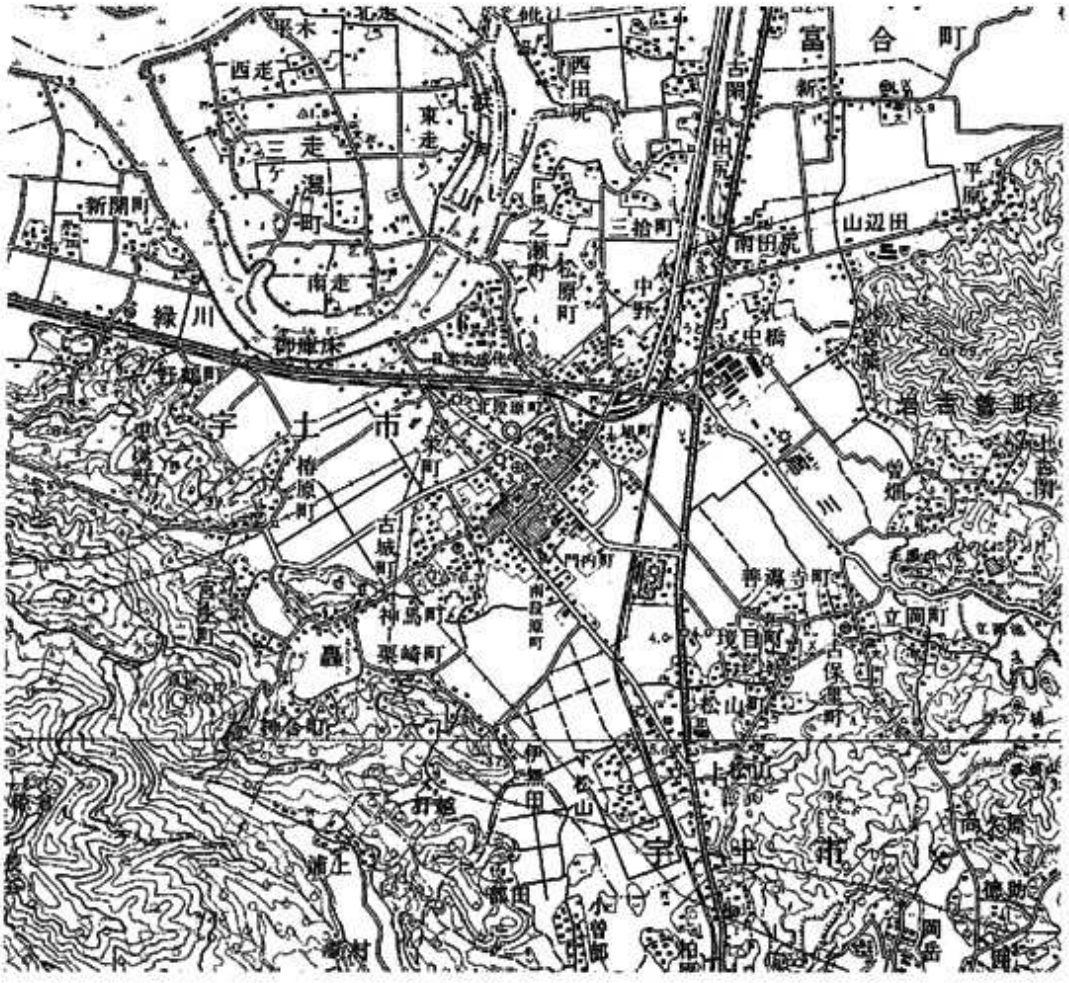


Fig 1　宇土城跡（城山）位置図（1／50,000）

Fig 2　宇土城跡（城山）地形測量図（1/2,500）

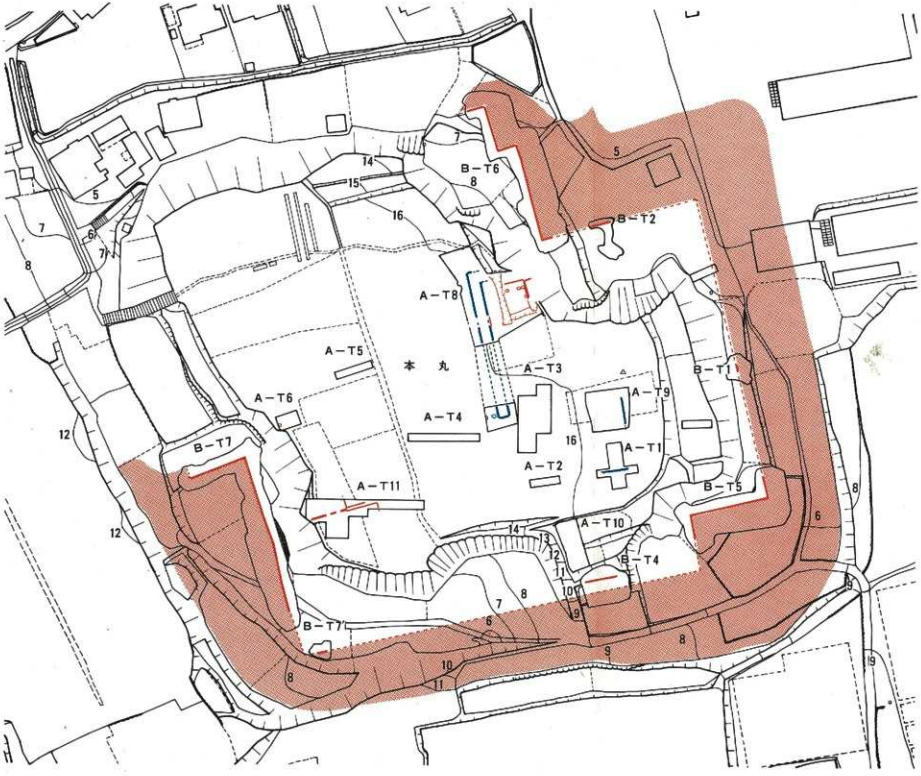


Fig 3　トレンチ及び遺構配置図（1/1,000）
（赤線上層遺，青線下層遺）

II　本丸跡の調査概要

1．本丸東側腰曲輪の調査

本丸跡は、一面ほぼ平坦であり、標高約16mを測るが、これを取り巻くように周辺に、1.5～2.0m低くなる腰曲輪（帯曲輪）と考えられる地域がある。特に、本丸東側の遺存がよいので、今回、草木の伐開と写真撮影を行なった。発掘調査は、53年度にＢ－Ｔ７トレンチで実施したが、城郭の建物等に伴う遺構の検出はなかった。

2．Ａ－Ｔ８′の調査

昭和55年度に本丸北東部、入隅（◣D）の上部にＡ－Ｔ８を設定し、発掘調査を実施し建物跡の遺構を検出している。今回調査したＡ－Ｔ８′は、この時に残された幅約１ｍほどのブリッジ状の地域であり、検出した遺構は建物跡の東側部分であり、排水溝と西面する石垣とこの北側で東へ折れる石垣の根石３石を確認した。過年度調査分も含め記述する。

建物跡は、周囲より約１ｍ低く、三方向を法面に囲まれ、北に開口する長方形の凹地に位置する。これを構成する礎石６、石列・石垣５方向、排水溝１を検出した。

北辺は、東西方向5.3m、７石の割石からなる石列（ＳＡ－１）で、西端の１石を欠く、石材上面をほぼ同一レベルにそろえ、比高差30cmの１段構築である。東端で南に折れ1.5m程延び排水溝へ続く。

西辺には、南北に長く幅２ｍ、深さ50cmの溝状の掘り込みを検出した。南端に１石のみではあるが安定した状態の石材があり、現位置を保つもので、東辺の石垣と対応する石垣が存在したことが考えられる。さらに西側には、溝底より1.8mほど高く幅3.5mの平場があり、その中央に傾いた礎石が存在し、ＳＡ－７で区切られる。

南辺は、石材使用の施設はなく、急傾斜で上面へ至る。法面下方には割石小片が東西に長く残っており、石列の存在の可能性を示す敷石の一部も残存する。

東辺は、今回新たに検出した地域である。西面する南北方向の石垣（ＳＡ－４）、長さ5.0m、高さ90cm、大きめの巨石を使用する。裏込めは、すでに崩壊・流出している。南は溝状の掘り込みだけを残し、南端まで延びると考えられ全長８ｍを測る。ＳＡ－４の北端で直角に折れ北面するＳＡ－５は、隅石を含め３個の根石が、Ｂ－Ｔ６－ｅ石垣と平行する。またこれらに沿って、長さ5.2m、幅26cm、深さ30cmの石組の排水溝がある。

礎石は、北側４、南側２を確認、北側100×80cmの大きさで２石が接する。扉部分の柱間3.32mを測る。南側は、控柱の礎石で、柱間2.7mを測る。Ｎ２、Ｎ３、それぞれに対する控柱は当初からなく、Ｎ４のものは現存しない。Ｓ５は125cm高いレベル差があるが、同一建物の礎石で

ある。

ＳＡ－１の東端北側の割石は、東方へ下る石段の最上段と思われる。

３．Ａ－Ｔ11の調査

本調査区は、本丸南西に位置し、耕作土を剝ぐとすぐ遺構面に至る。検出した遺構は、東西方向の石組溝である。方位は、Ｎ－77°－Ｅを示し、全長18.7ｍを測る。溝の作りは一様ではなく中央で東西の特徴を二分する。東側は、幅90cm、深さ80cmを測り、側壁南は40～60cm大の河原石を２～４段積む。東コーナー部の一部には石臼片を使用する。北壁は雑然と河原石、角礫、五輪塔の一部が集在する。溝は中央部で幅25cmと狭くなる。西側部分は両壁とも小ぶりの角礫を４～５段積み上げ幅40～55cm、深さ70cmを測る。底には偏平な敷石を密に敷き西方の内堀へ向かって低くなる。２ヶ所に橋状の施設を設け、１号幅1.7ｍ、２号幅0.95ｍを測る。

この排水溝は、内堀（Ｂ－Ｔ７－ａ石垣）とほぼ直角の位置にある。

ある。

ＳＡ－１の東端北側の割石は、東方へ下る石段の最上段と思われる。

３．Ａ－Ｔ11の調査

本調査区は、本丸南西に位置し、耕作土を剝ぐとすぐ遺構面に至る。検出した遺構は、東西方向の石組溝である。方位は、Ｎ－77°－Ｅを示し、全長18.7ｍを測る。溝の作りは一様ではなく中央で東西の特徴を二分する。東側は、幅90cm、深さ80cmを測り、側壁南は40～60cm大の河原石を２～４段積む。東コーナー部の一部には石臼片を使用する。北壁は雑然と河原石、角礫、五輪塔の一部が集在する。溝は中央部で幅25cmと狭くなる。西側部分は両壁とも小ぶりの角礫を４～５段積み上げ幅40～55cm、深さ70cmを測る。底には偏平な敷石を密に敷き西方の内堀へ向かって低くなる。２ヶ所に橋状の施設を設け、１号幅1.7ｍ、２号幅0.95ｍを測る。

この排水溝は、内堀（Ｂ－Ｔ７－ａ石垣）とほぼ直角の位置にある。

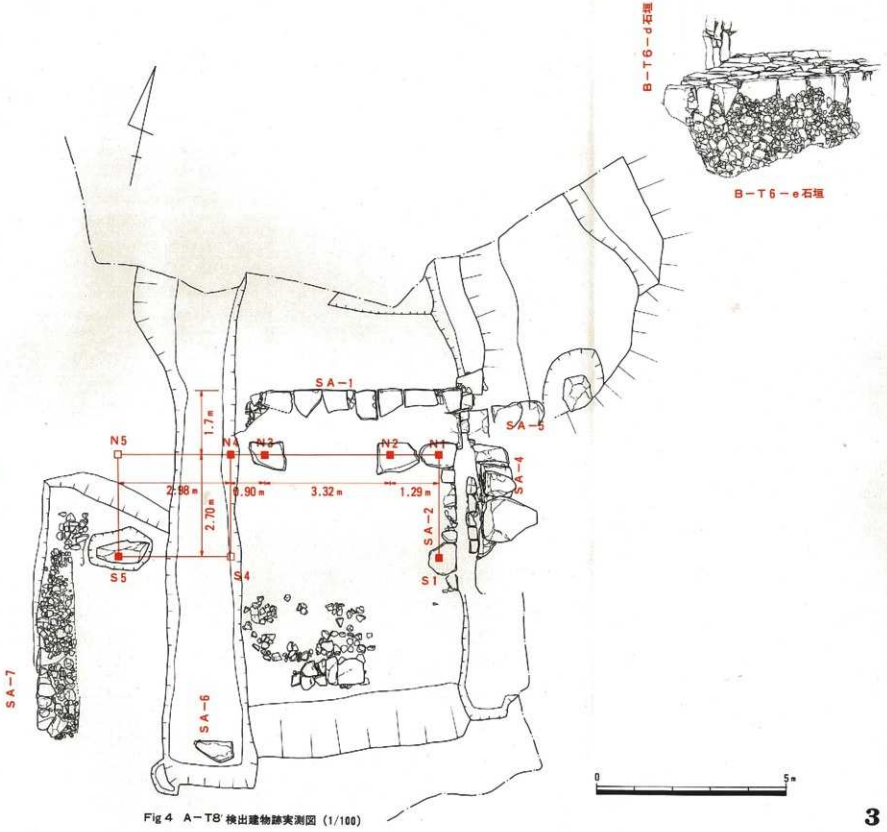


Fig 4　A－T8' 検出建物跡実測図（1/100）

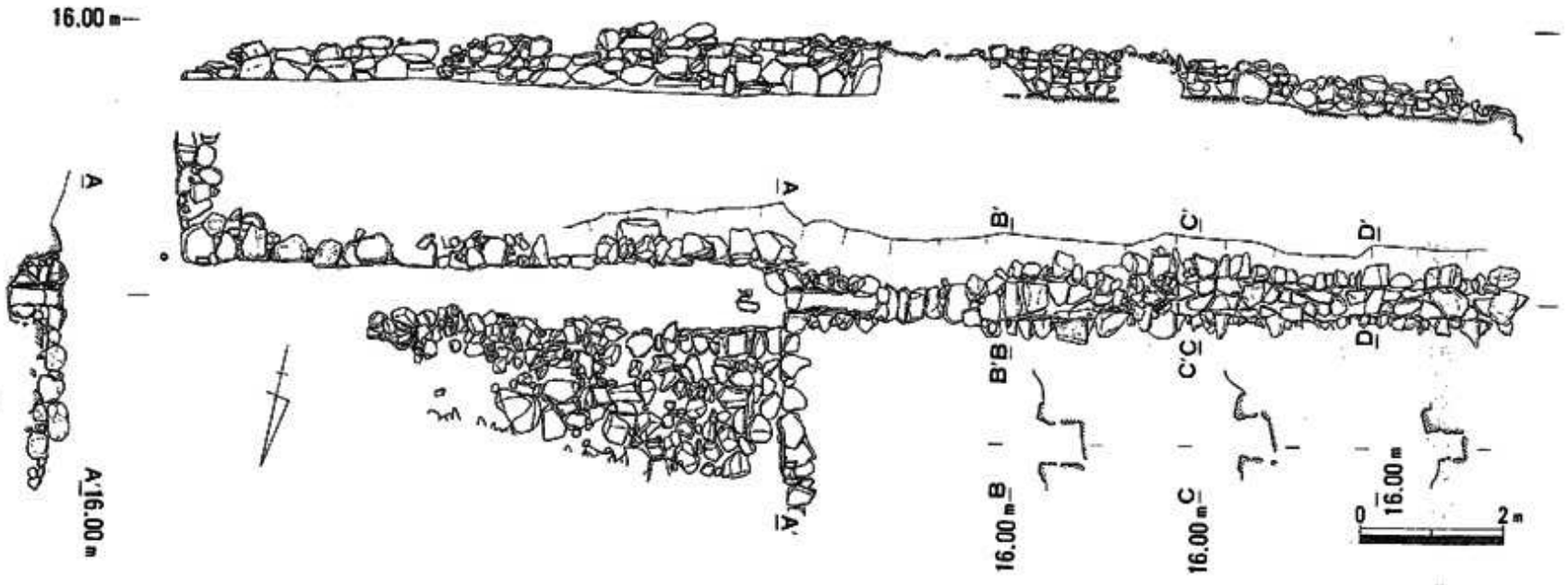


Fig 5　A－T11検出排水溝実測図（1/100）

Ⅲ　内堀跡の調査概要

内堀の調査は、昭和53年度の調査時にＢ－Ｔ１～Ｂ－Ｔ３、昭和55年９月に熊本県教育委員会文化課の調査で出隅（▲Ｅ）と内堀外縁の調査が行なわれ、本丸北東の一部が明らかになっていた。

今年度は、本丸石垣の平面形の確認のために、可能な限り、広い範囲の調査を行なった。発掘作業には、重機を用いたために、細部について把握できない点も多々あるが、これらの概要を以下述べることにする。

１．Ｂ－Ｔ４の調査

本調査区は、本丸南側ほぼ中央の内堀に位置する。石垣は、東西方向長さ約9.5m、標高7.0～8.9mの間約２ｍを検出した。石垣は、Ｎ－83.0°－Ｗで南面しており傾斜角63°を測る。打込ハギで築かれ、検出した高さ約２ｍの面は５段の石積みで成っている。ハラミはほとんどない。

石垣の下部は、Ｂ－Ｔ７－ａ同様の断面（弓状）を呈すると推定できるが、調査区域が限定されたため、未確認である。また、上部は、現在の崖面に沿って垂直またはそれに近いところま

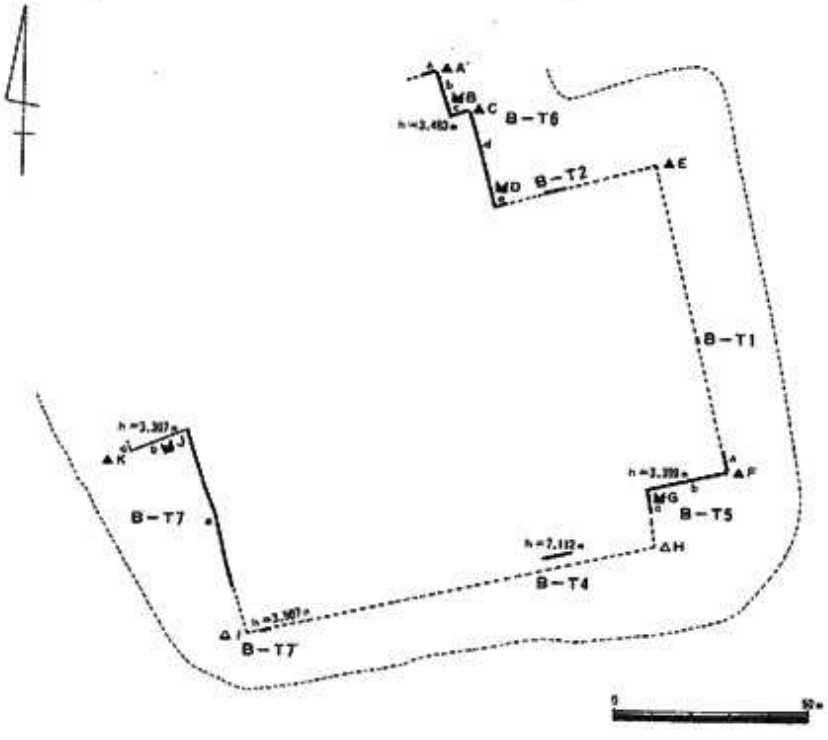


Fig 6　石垣配置図（1/2,000）

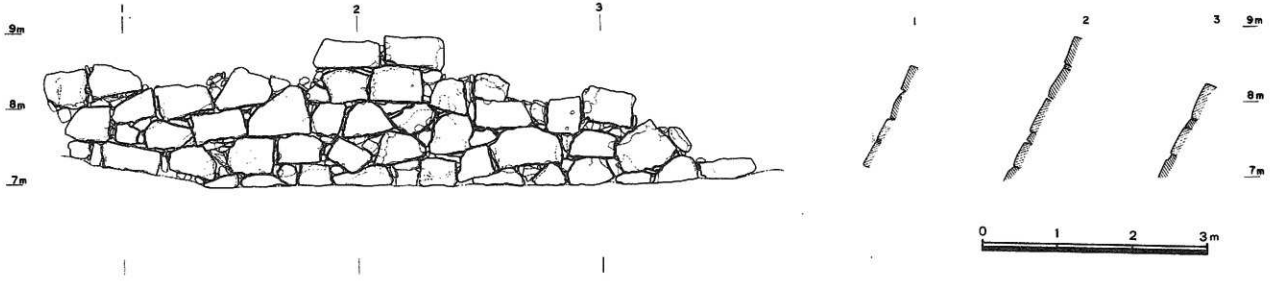


Fig7 B－T4 石垣実測図（1／50）

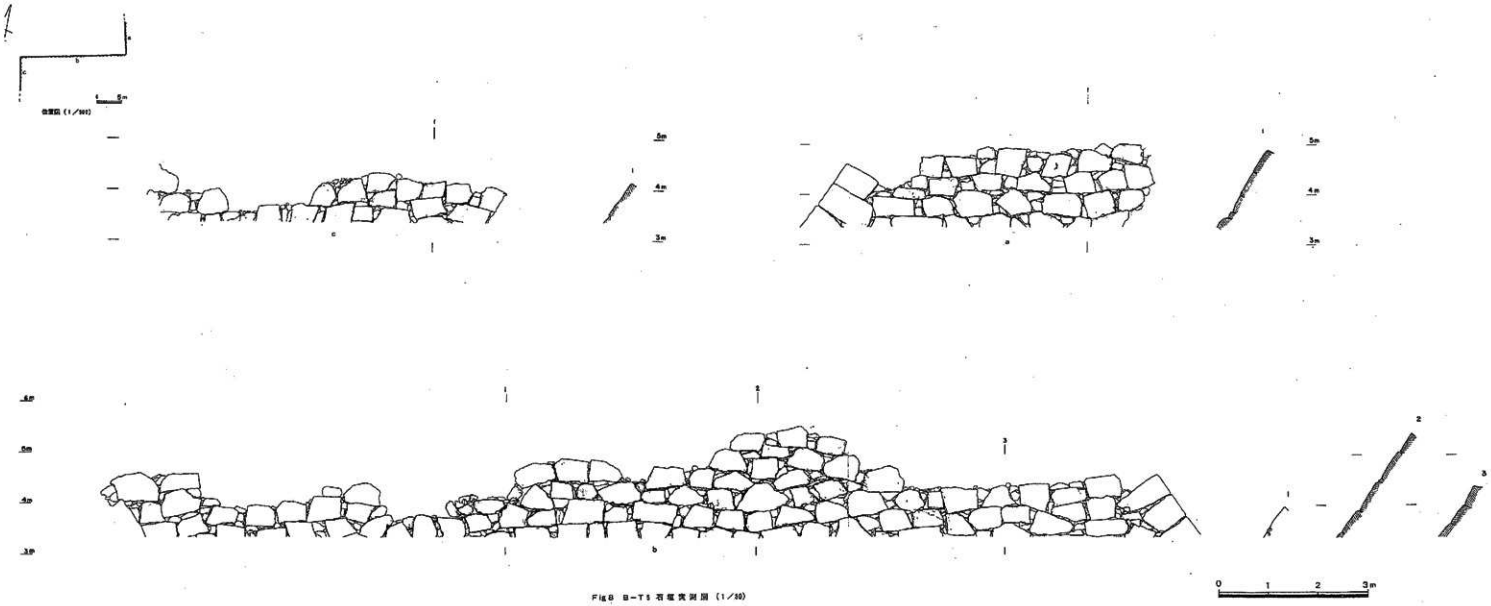


Fig.8 B-T1 石垣実測図 (1/30)

で上がると思われるが、石垣の高さについては、正確な値を知るに至っていない。

石垣は、断面２を基準とし、東へ26mを測る△Hから北へ折れ、B－T５－cへ続く、また、西側は、B－T９～B－T８～B－T７′を通り△Iで北へ折れる。B－T４を一部とする△H～△Iの石垣は、何の曲折もなく、ほぼ一直線と考えられ長さ約107mを測る。対岸との堀の幅は約22mを測る。

２．B－T５の調査

本調査区は、本丸南東隅の内堀に位置する。調査区の北B－T１、西B－T４で、それぞれが直交する方向の石垣を確認しており、当然、出隅が存在する地点であることは予想された。検出した石垣は、単に１回の曲折ではなく、出隅１（▲F）、入隅１（◣G）、３方向の石垣（a、b、c）の確認と、B－T４となす出隅（△H）の位置の想定が出来た。

この調査区で検出した石垣の延べ延長は24.7m。標高3.36mで水面に達するので下部の検出は行なうことが出来なかった。

B－T４－a石垣は、南北方向(N－13.5°－W)で東面する。傾斜角58°を測り、横目路のよく通った打込ハギで築かれている。この石垣は▲E～▲Fの一部で、ほぼ一直線、E・F間の距離81.0mを測る。対面する法面との堀幅は約18mである。

B－T４－b石垣は、東西方向(N－75.0°－E)で南面し、傾斜角55°を測る。積み石の遺存度にバラツキがあり、残りの良い所で標高5.6m、水面上2.2m、石積み６段、悪い所で標高3.8m、水面上0.4m、１段の石積みである。東に▲F、西に◣Gがあり、その間の距離21.2mを測る。何のハラミもなく一直線に延びる。打込ハギで築かれている。堀幅は約37mを測り、内堀でも広い幅を持つ。

B－T５－c石垣は、南北方向(N－8.0°－W)で東面し、傾斜角54°を測る。遺存度は悪い。検出部分の長さは約７mではあるが、さらに南へ延び△Hで西へ折れB－T４へ続く、◣G～△H間約14.5mを測る。堀幅約39mを測り、最大である。

出隅（▲F）は、石垣面に使用された積み石に比較しても特に大きく110cm×70cm×50cmを測る直方体に近い形をなす。水面下二石までは確認出来たが基底部までは至っていない。わずかではあるが算木積みで築かれ、傾斜を整えるために合石をたくみにつめている。

入隅（◣G）、特に大きな積み石の使用はなく、噛み合せも深くはない。ただ、裏込めだけは厚く、大ぶりの栗石を使用している。

３．B－T６の調査

本調査区は、本丸北東の内堀に位置する。昭和53年度に行なったB－T３の調査で、入隅（◣D）が確認されており、これから北へ続く石垣を延べ延長約50mほど検出した。曲折は複雑で、

出隅２（▲A、▲C）、入隅２（◣B、◣D）、５方向の石垣（a～e）を確認した。

B－T６－a石垣は、東西方向で北面する。積み石の遺存も悪く検出した石垣は、水面上１石、わずかに上部を出すもの２石、他は水面下であった。石垣の東は、▲Aで南へ折れる。西側は、直線で延びると、崖面にはいり込むので一度北へ折れ、西へ続くものと考えられる。

B－T６－b石垣は、南北方向(N－12.5°－W)で東面する。傾斜角61°を測る。石垣の遺存は、水面(標高3.36m)上、１段から３段、最高所で標高5.0mを測る。検出した石垣の長さは水面上で10.6m、▲A～◣B間は12.5mを測り直線で延び、ハラミはない。石積みは、横目地のよく通る打込ハギである。対応する岸までの堀幅は、約27mを測る。

B－T６－c石垣は、東西方向(N－75.0°－E)で北面する。西に◣B、東に▲Cがあり、その間は直線で長さ5.1mを測る。傾斜角は58°である。石垣は水面上２段しか遺存せず、下部は、水面下で根石まで調査は至っていない。

特に、石垣の距離が5.1mと短い点が注目される。

B－T６－d石垣は、南北方向(N－13.0°－W)で東面する。遺存度にバラツキがあり、ハラミも著しい。残りの良い所で標高5.8m、水面上2.4m、石積み６段、悪い所で標高3.6m、水面上0.3m、１段の石積みである。北に▲C南に◣Dがあり、その間の距離25.9mを測る。ハラミのせいか、平面的にも石垣は歪んでいる。打込ハギで築かれている。堀幅は23mを測る。

B－T６－e石垣は、すでに昭和53年度に確認ずみである。石垣は、東西方向(N－78.0°－E)で北面する。傾斜角は急で77°を測る。この石垣は、◣D～▲E間の一部で、◣Dから、東へB－T２を通り42.6m延び▲Eで南へ折れ、B－T１～B－T５－a～▲Fへ続く。ここで、注目されるのは、石垣の傾斜が最も急であるということで、上部遺構との関係が深い。

出隅（▲A）は、B－T６－a、bがなす出隅であるが、隅石は、水面下に存在するので、くわしくは観察出来なかった。

入隅（◣B）は、特に大きい石材の使用は認められない。噛み合せもほとんどなく、両方向の石垣のなす角度85°を測る。

出隅（▲C）は、３石を確認。算木積みに見られるような隅石の噛み合せはない。ただ単に同じ大きさの石を積み上げているが、稜線の角度を保つために、石材間に合石をたくみにつめ込んでいる。

入隅（◣D）は、これまで確認出来た入隅で最も残りが良い。ここにも、入隅を形成するための特殊な石の使用はない。２方向交互に噛み合うように積んではいるが、深くはない。

４．B－T７の調査

本調査区は、本丸南西の内堀に位置する。調査前から、すでに石垣は露出しており、南北に延びる両側の石垣を追ってみた。検出した石垣は、延べ約59m、出隅（▲K）、入隅（◣J）、

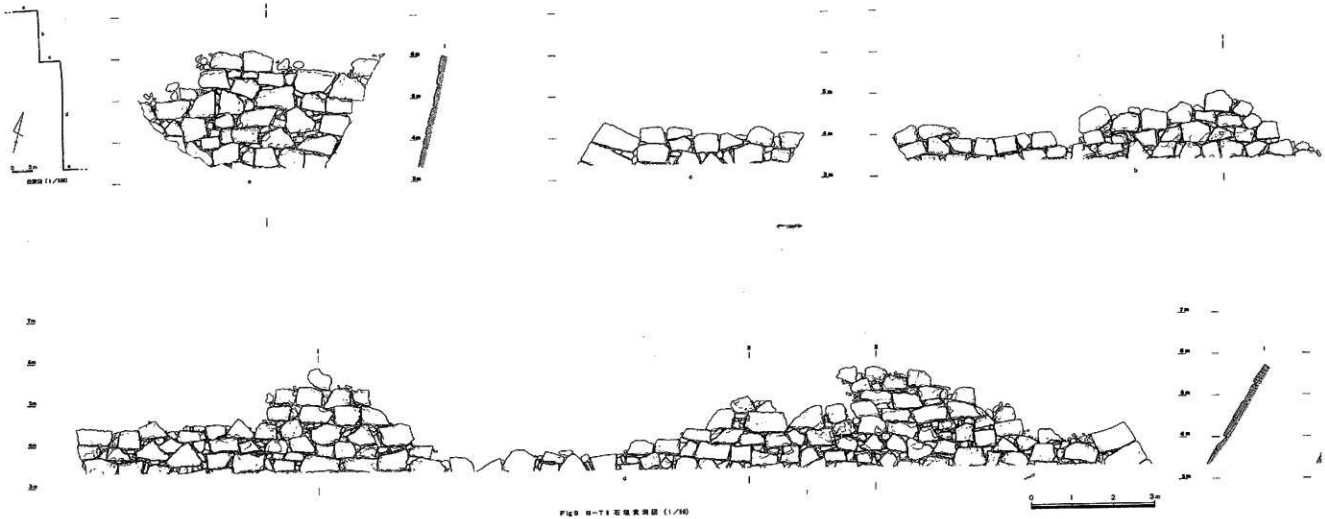


Fig.9 B-T1 石垣実測図 (1/30)

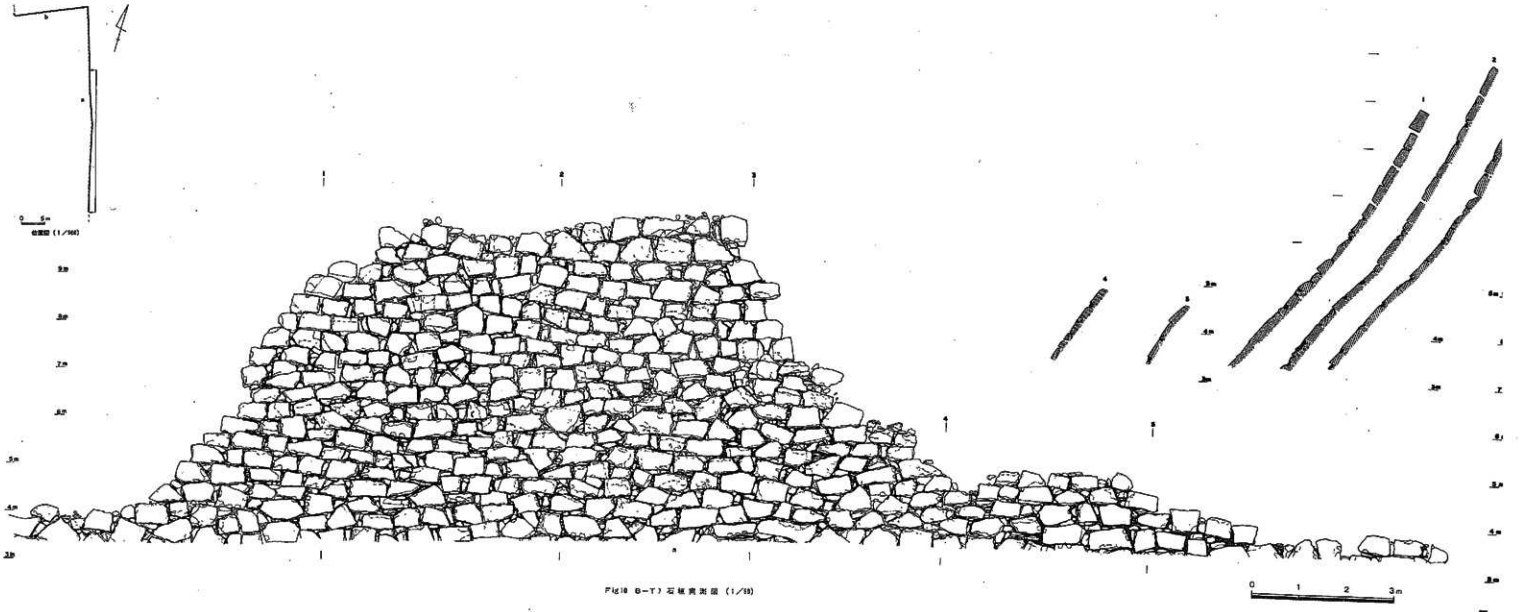


Fig18 B-T) 石垣実測図 (1/30)

と３方向の石垣（ａ～ｃ）を確認した。

Ｂ－Ｔ７－ａ石垣は、南北方向(Ｎ－11.5°－Ｗ)で西面する。北は■Ｊで西へ折れｂへ続き、南は△Ｉで東へ折れＢ－Ｔ７′へ続く、この間約54.5mを測り、そのうち北側の約43mを検出した。標高3.36mで水面に達するため下部の調査は行なっていない。石垣の残存にも極端な差があり、悪い所は、水面近く１段の上部がわずかに出ている程度である。良い所は、標高10m水面上6.8ｍと石垣中最も高く残り石積み18段を数える。断面は、水面から標高５ｍまでは、面側にわずかに盛り上がるハラミが生じている。これより上部は、わずかな弓状を描いており、全体的には、歪んだ弓状を呈する。傾斜角は、水面上１ｍまでは51.0°、最上部１ｍ間は66.0°を測る。対岸との堀幅は20～30mである。

Ｂ－Ｔ７－ｂ石垣は、かなり遺存が悪く、ほとんどが水面の前後である。■Ｊが近く3段でわずかに良い。東に■Ｊ、西に▲Ｋがあり、長さ16.0mを測る。

Ｂ－Ｔ７－ｃは、石垣面の検出はほとんどなく、Ｂ－Ｔ７－ｂの西端▲Ｋで北へ折れる石垣である。

入隅（■Ｊ）は、Ｂ－Ｔ７－ａ、ｂがなす。ａ側３石、ｂ側４石を検出、さほど大きくはない割石を使用し、噛み合せもほとんどない。

出隅（▲Ｋ）は、１石の上部だけの検出であり、細部については不明である。

５．Ｂ－Ｔ７′の調査

本調査区は、Ｂ－Ｔ７の南に位置する。Ｂ－Ｔ７－ａの続きを確認のために設定し、東西方向の石垣を検出した。石垣の西には、Ｂ－Ｔ７－ａとなす出隅（△Ｉ）を想定することができ、東は、Ｂ－Ｔ８～Ｂ－Ｔ９を通りＢ－Ｔ４～△Ｈへ続く。内堀の幅は、現況で考えられていた堀のほぼ中央に石垣を確認したのでかなりせまくなり約13mを測る。

６．Ｂ－Ｔ８、Ｂ－Ｔ９の調査

Ｂ－Ｔ８は、調査区が限定されたため、裏込めの一部と積み石の石尻と思われる部分を確認した。△Ｈ～△Ｉ石垣の一部である。

Ｂ－Ｔ９は、内堀を埋める廃棄物が４ｍ以上あり、その下に石垣の一部を確認した。△Ｈ～△Ｉ石垣の一部であり、東のＢ－Ｔ４、西のＢ－Ｔ８に続く。

Ⅳ おわりに

本年度は、本丸においてA－T８、A－T11、内堀においては、B－T４～B－T９の調査を実施したが、今回までの調査を含め出土遺物については、本概報でも報告することが出来なかった。以下、調査の成果について簡単に整理しておく。

遺構について

①礎石建物跡。宇土城の全体、あるいは部分を示す古図や建物などの記録がないので、直接的に建物を推定するには難がある。そこで、礎石等の配置がよく似た熊本城不開門を比較の対象とした。

まず第一に、両建物とも本丸の北東部に位置する。不開門は、北東すなわち丑寅の方角にあり、鬼門とされ通常の出入には使用されてはいなかったらしい。『肥後宇土軍記』に……本丸之虎口貳ケ所大手へ出ル口ハ北東之間ニ明たり……とあり、この建物跡の方角に該当する。次に、城門、門内、門外に分け各部分の比較を試みた。城門は、基礎施設の比較である。両建物とも、床面のレベルは、周囲よりも背丈以上低くなる凹地に立地する。入口には一段の石列が並び、左右には石垣を有し、共に、左側壁に沿って排水溝がある。また、礎石の配置もほぼ同じであり、扉部分の柱間3.32m（宇土城）3.28m（不開門）、控の柱間2.70m、3.70mをそれぞれ測る。このように、形・規模がほぼ同じであり、各部分にも多くの共通点がある。平面形もほぼ一致しており、現段階で上部構造を考えるには、不開門が櫓門であるように、この建物の上部構造も同型もしくは、これに類似する櫓門であったとするのが妥当であろう。また門の内側は、この門が直線的に通過するのに対し、不開門は右へ折れる。門外は、不開門は門を出るとまず右、次に左へと、それぞれ直角に折れ、右方向へ大きくカーブを描きながら本丸外へ出る。この門の場合は、右へ直角に折れ、石段最上部と思われる石材が残るが、その先は遺存しない。しかし、B－T６－e石垣の傾斜角が急であることが石垣の高さを制限しているならば、この石垣に沿って東へ延び、本丸外へ出る通路が考え

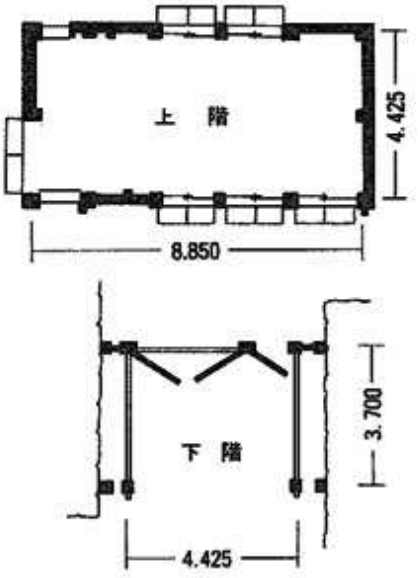


Fig11　熊本城不開門平面図（1／200）

（毎日新聞社、『重要文化財』16建造物Ⅴ、p114、1975、より作成）

られる。

このように、門内外の様子には差異が認められるが、基本的には同様式を程するものと考えられ、通路の差はそれぞれの城郭の縄張の特徴と考えたい。

②排水溝。本丸南西で検出した石組の排水溝は、直下のB－T７－a石垣とほぼ直角の位置にあり、傾斜も西側で急に増す。これは、近世城郭などに通例みられるような石垣天端より、少し下方に排水口を設け、本丸から内堀へ排水を行なう施設であろう。

③石垣(本丸の平面形)。これまでに確認した石垣は、延べ163mこれによって復原可能な範囲が、全体の約７割に達した。出隅７箇所（未確認２）、入隅４箇所を確認、東西幅148m、南北幅132mを測る。

本丸は、東西南北にほぼ平行（8°～15°の振れ)、基本的には方形をなす縄張である。未確認の北西隅を除けば、隅部に１または２箇所の入隅を設け屈曲をつけている。塁の長さにも変化があり、最も短い5.1m、長い100m以上（推定：確認部分はＥＦ間の81m）と極短な差がある。さらに傾斜角にも変化（54°～78°）をもち、場所によっては著しく増すところもあり、上部施設の関係と考えられる。断面形についてみれば、最も残りのよいB－T７－a石垣が高さ6.7mを測り、断面形が弓状をなすことは容易に識別出来るが、ハラミが生じていて正確な値を知るに至っていない。積方は打込ハギであり、石垣全体の反りを揃えるために、横目地をほぼ水平にし、精巧である。

このように本丸は、複雑ではないが、塁に屈曲を持ち、発達した石垣と幅の広い水堀は城を堅固にしており、近世城郭の特徴を十分に備えている。

時期について

今年度検出の遺構は、すべて同一時期で、宇土城の最も新しい城郭の一部である。調査概報（Ｉ）で指摘したように、従来から宇土城は小西行長の居城とされてきたが、本丸には約２ｍほどの盛土があり、小西時代の遺構・遺物は盛土の下層から出土するので、現地形を含め、上層の築城者は関ヶ原以後、肥後一円を領した加藤清正と考えられる。

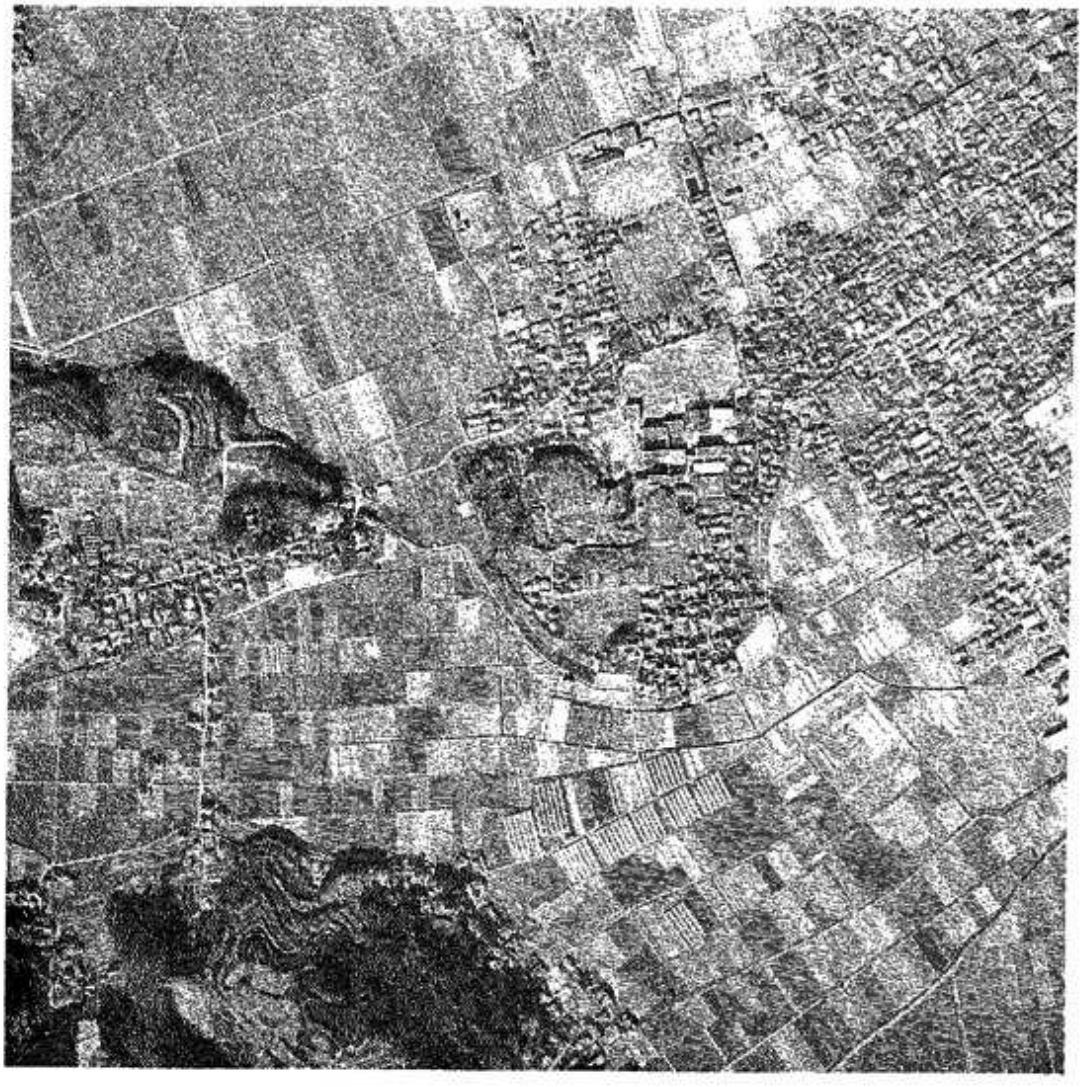
『肥後宇土軍記』には、……宇土之城縄張等清正之心ニ不相應之所有之由ニて毎歳方ゝ普請有之後ハ丈夫に罷成候已後ハ隠居所に可被致との取沙汰也……の記録がある。さらに検出した遺構が清正築城の代表にされる熊本城に共通する部分が多くみられるのも、清正普請を証左する一要素ではないだろうか。

さらに、清正普請の時期を考えるならば、熊本城完成の慶長12年（1607）以降、あるいは、宇土城出土の軒平瓦「慶長十三年八月吉日」銘が示す年代が妥当であろう。

しかし、これらの中には、推察の域を脱しない部分もあり、今後十分な検訂を加えなければ

図　　版

PLATES



宇土城跡（城山）と周辺空中写真

撮影データ

撮影年月日　昭和56年12月24日　12時55分

撮影縮尺　1：8000

（東洋航空事業株式会社提供）

宇土城跡（城山）空中写真

宇土城跡（城山）本丸空中写真

本丸東側腰曲輪（南西から）

腰 曲 輪　（北から）

A－T8′検出建物跡（北から）

建物跡　（南から）

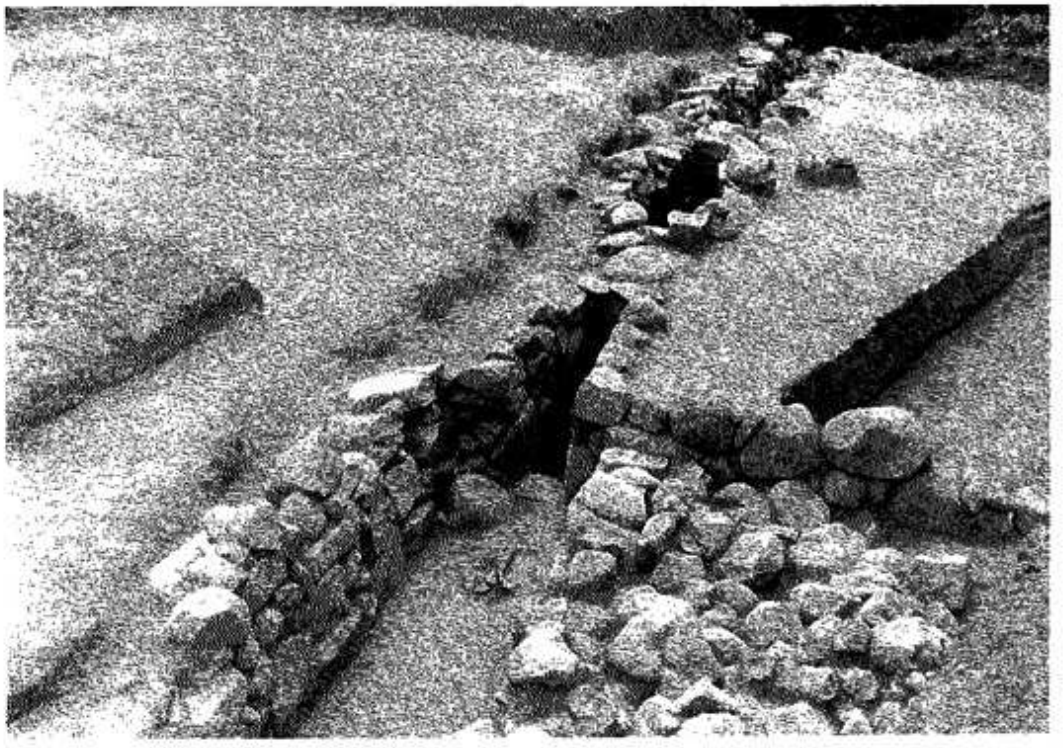
建物跡　（西から）

S A －4　　（北東から）

側　　溝　（南から）

礎　　石　（北から）

A－T11 遺 構 全 景 （東から）



排 水 溝 （東から）

中 央 部 分 （東から）

東コーナー部分（北から）

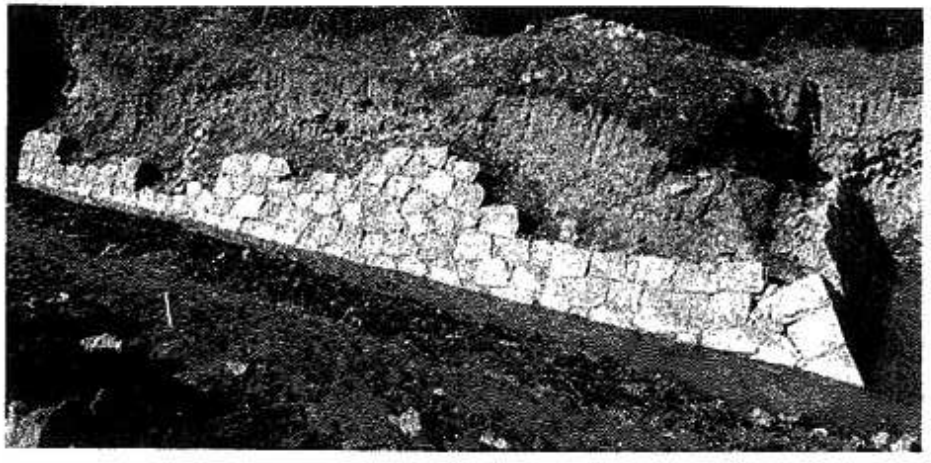
橋状施設（東から）

西側敷石の状態（西から）

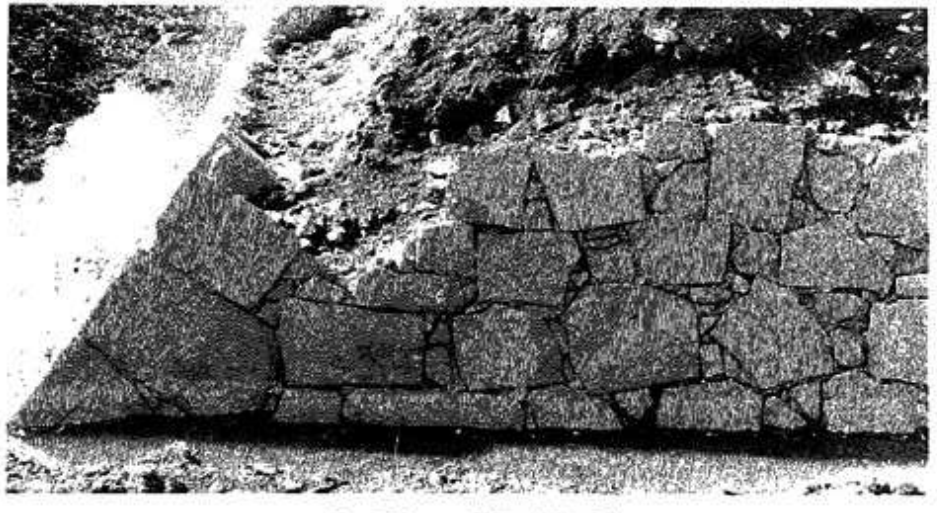
B－T4　石垣（南東から）

B－T4　石垣（南から）

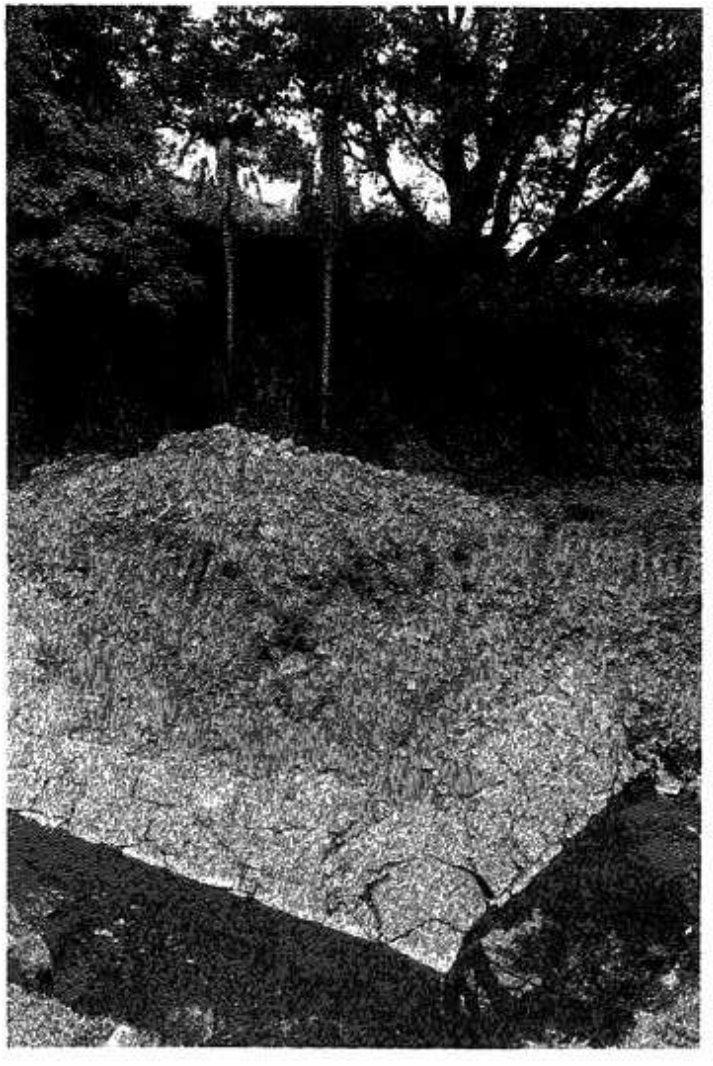
B－T4　石垣（東から）



B－T5－b　石垣（南から）



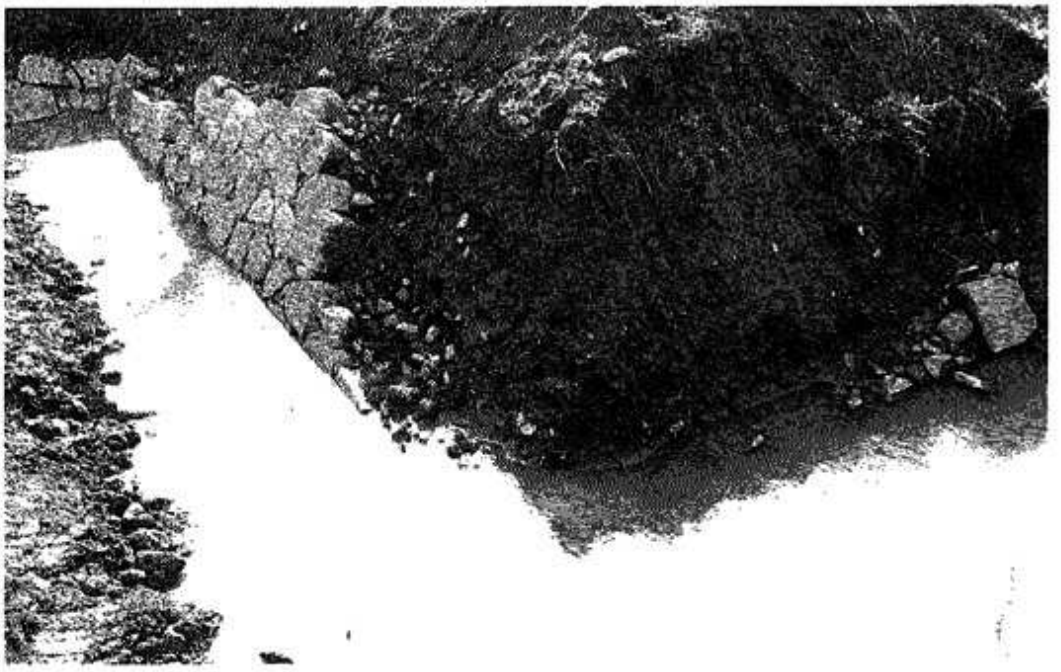
B－T5－a　石垣（東から）



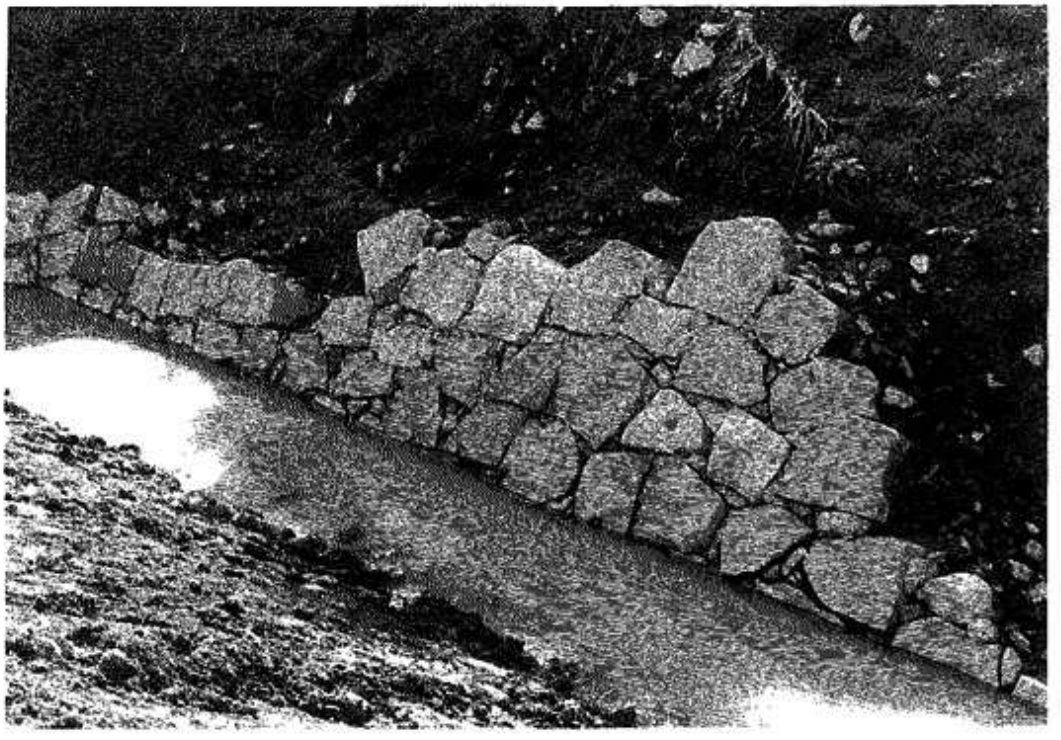
出隅（▲F）出土状態（南東から）

入隅（MG）出土状態（南から）

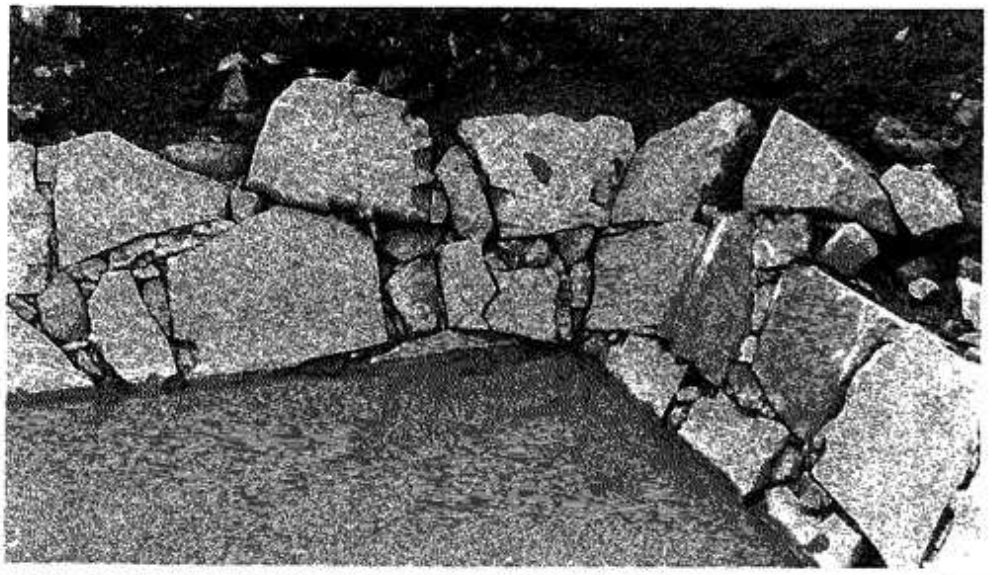
B－T5－b　石垣（東から）



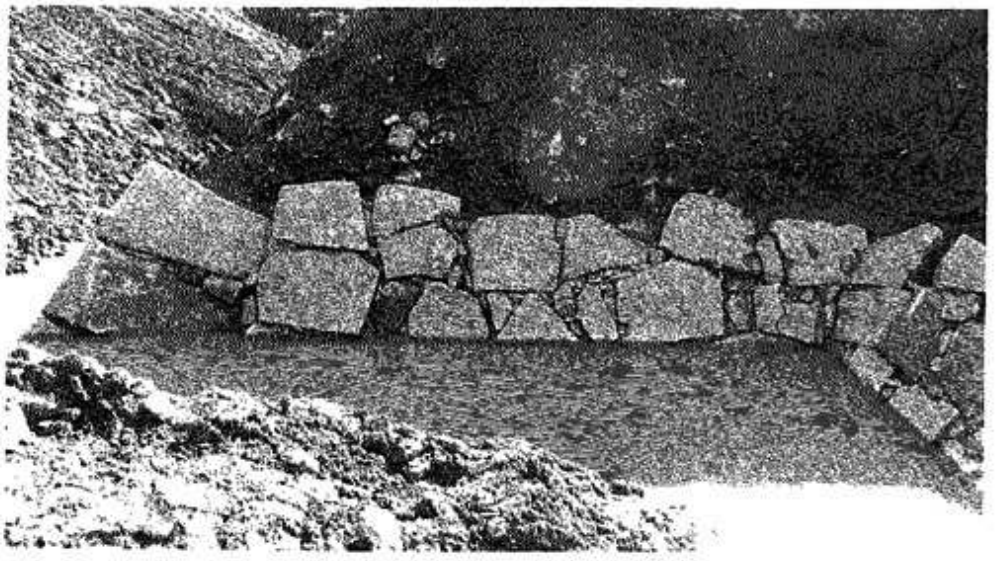
出隅（▲A）出土状態（水面下：北東から）



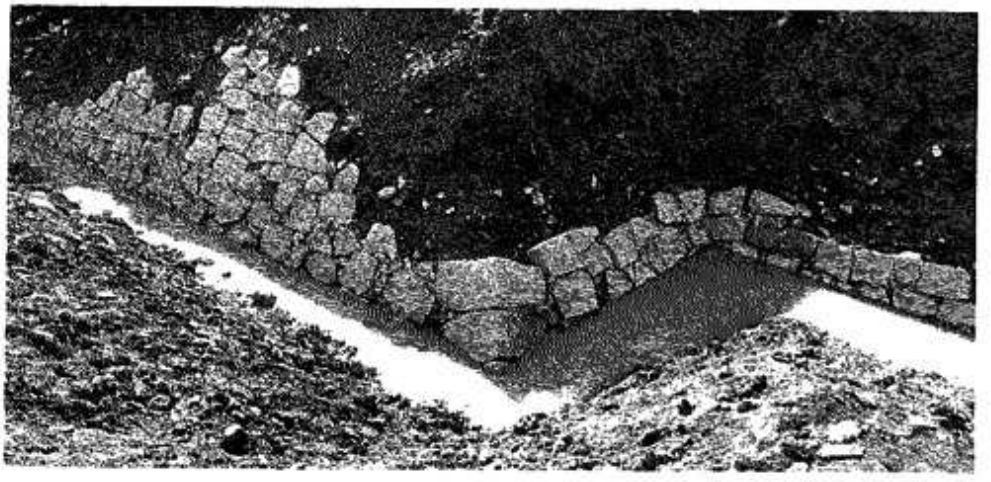
B－T6－b 石垣（北東から）



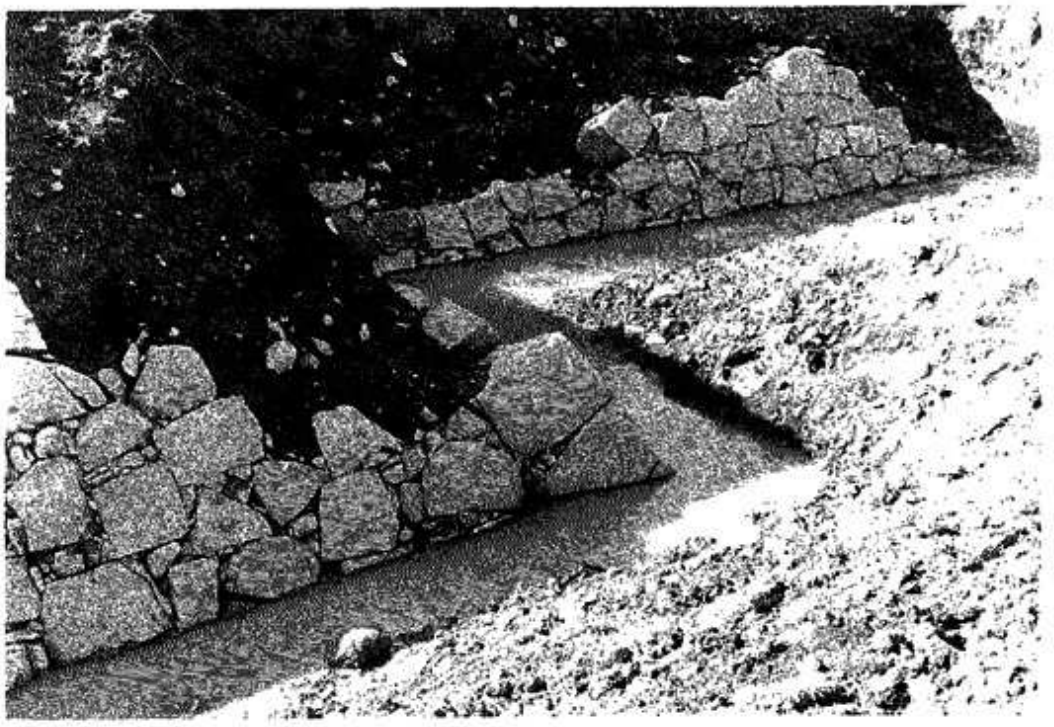
入隅（■B）出土状態（北から）



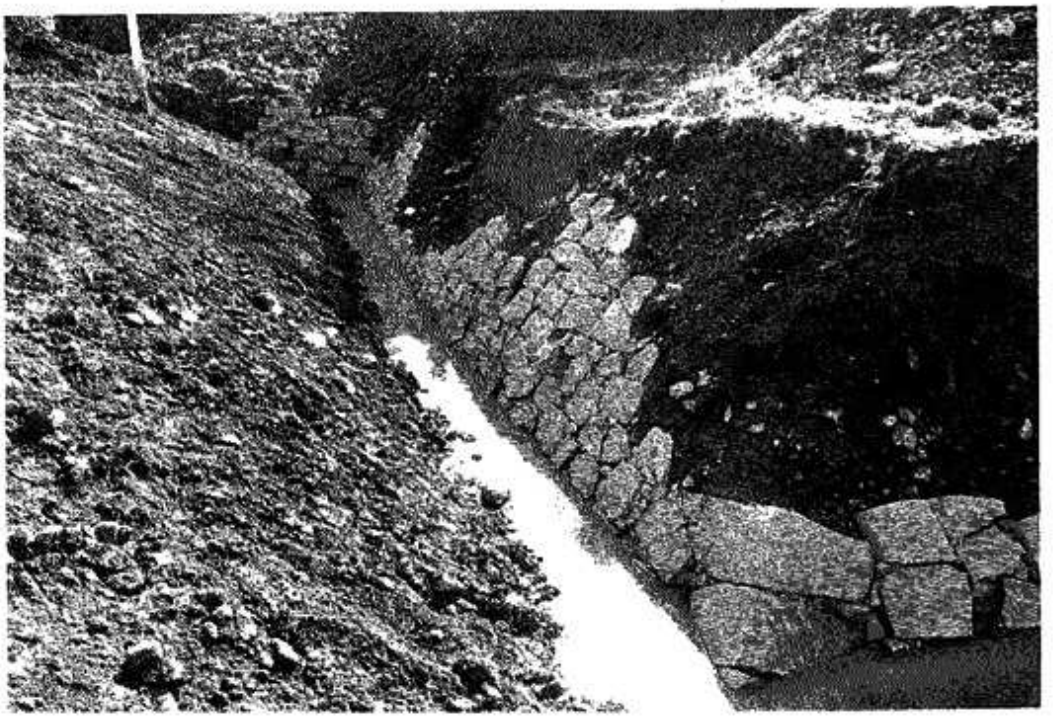
B－T6－c石垣（北から）



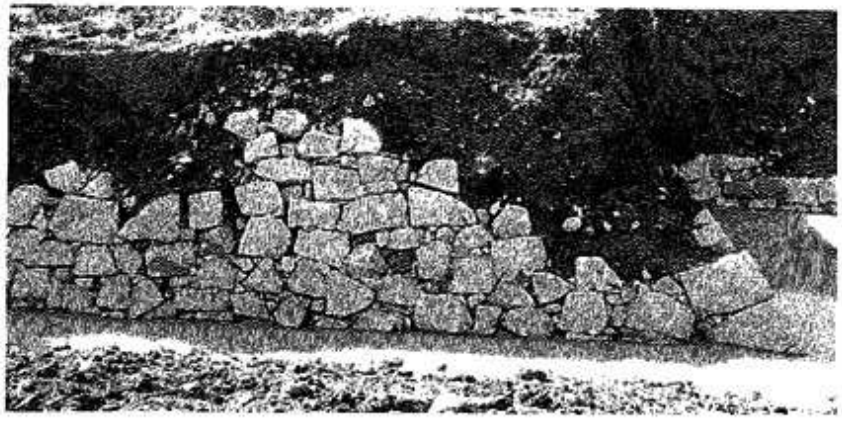
出隅（▲C）出土状態（北東から）



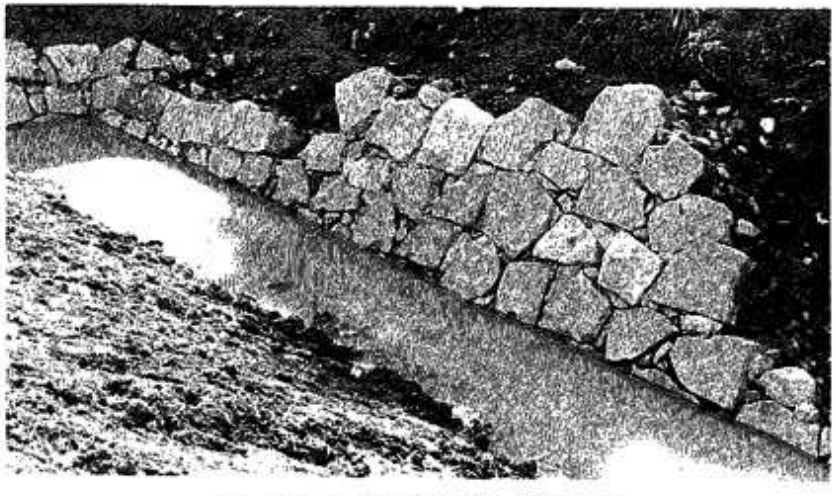
B－T6－b, d　石垣出土状態（南東から）



B－T6－d　石垣（北から）

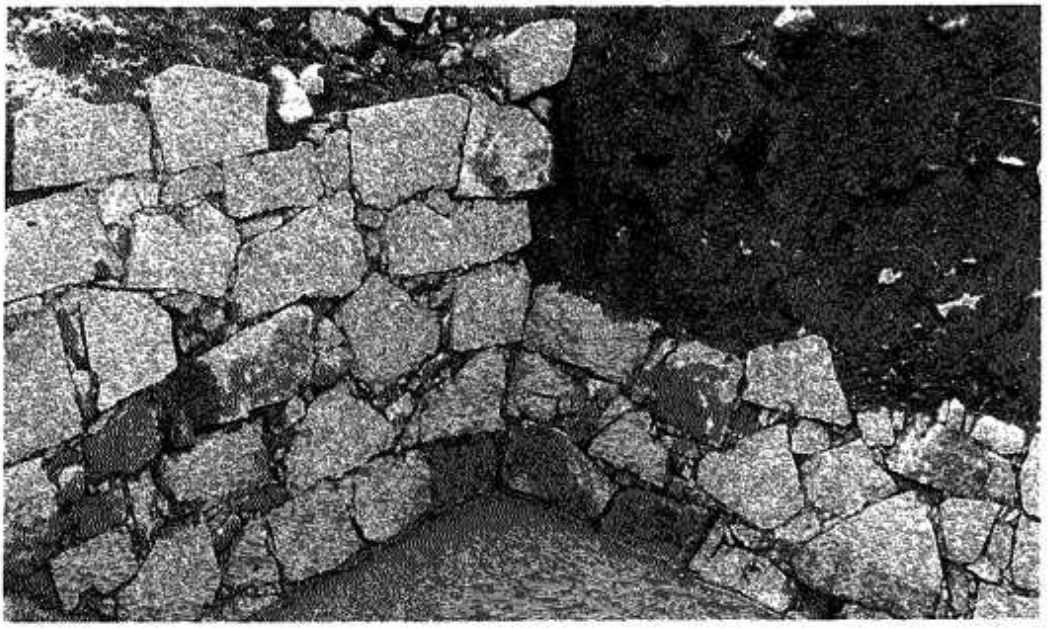


B－T6－d　石垣北側部分（東から）



B－T6－d　石垣南側部分（北東から）

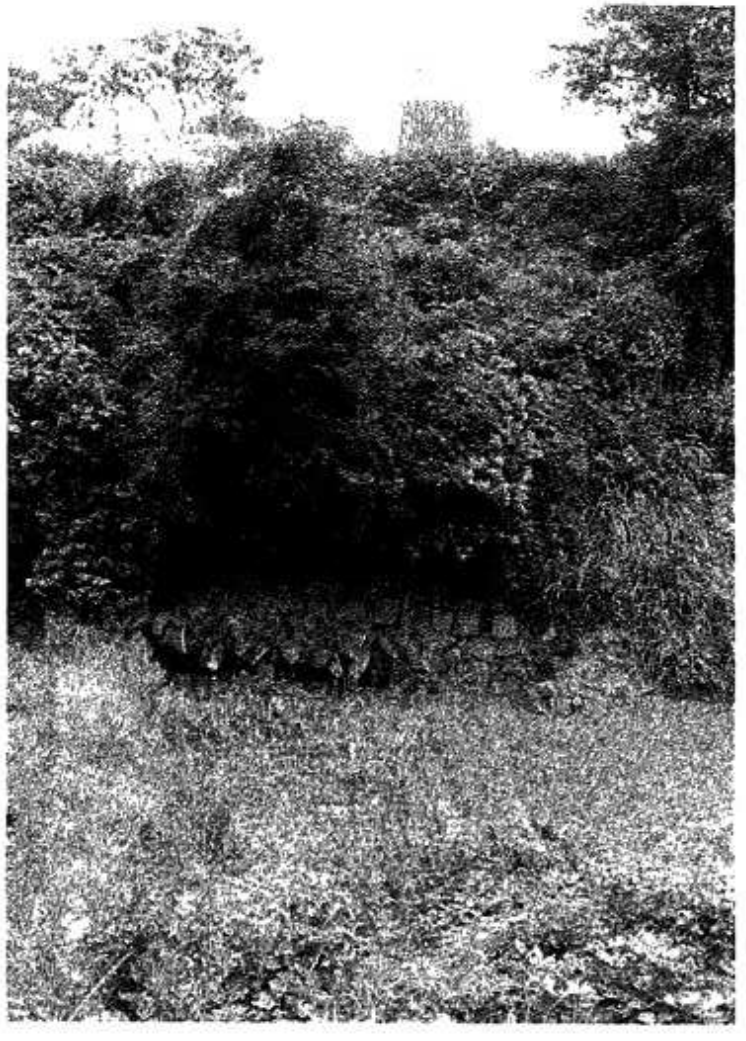
B－T6－d　石垣（北から）



入隅（■D）出土状態（北東から）

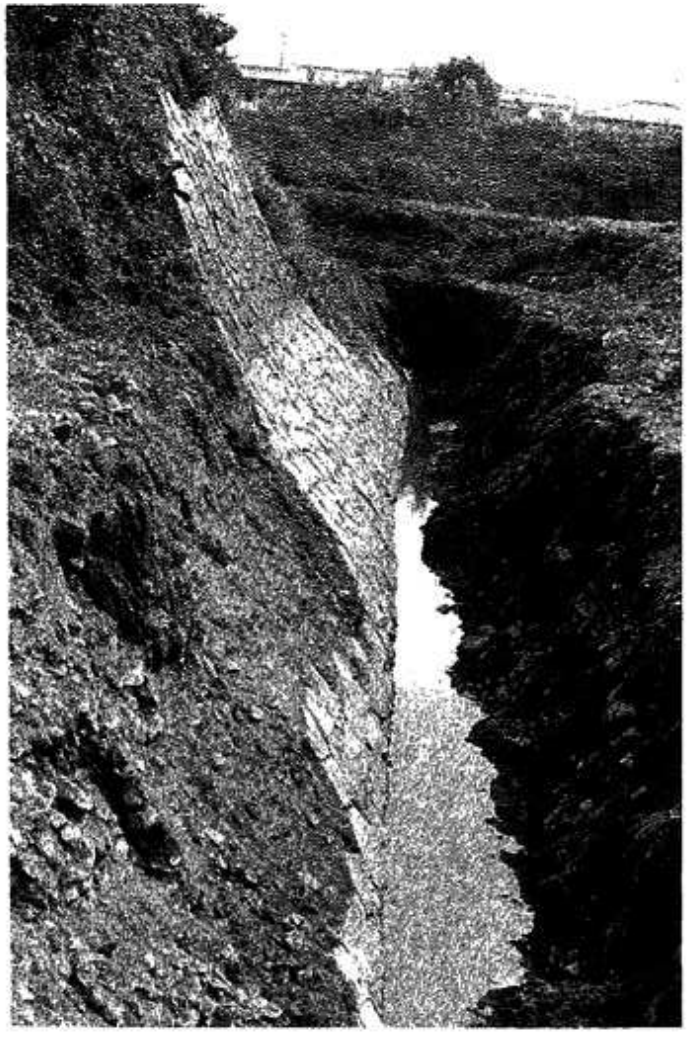
B－T6－e　石　垣（北から）

B－T7－a　石垣出土状態（西から）

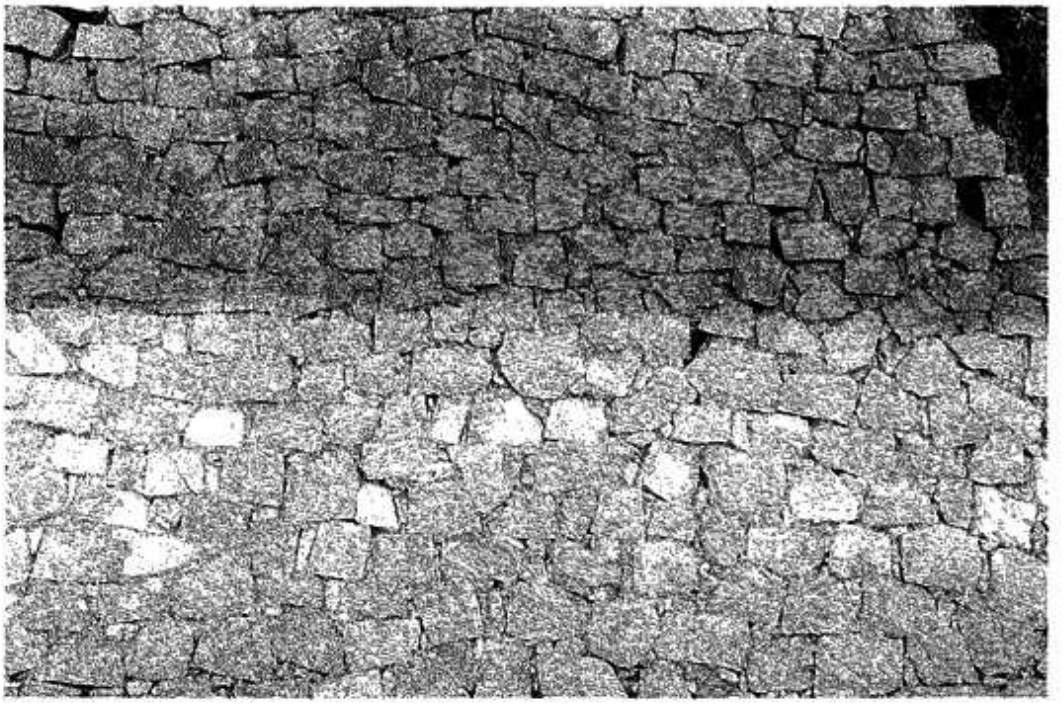


B－T7－a　石垣調査前（西から）

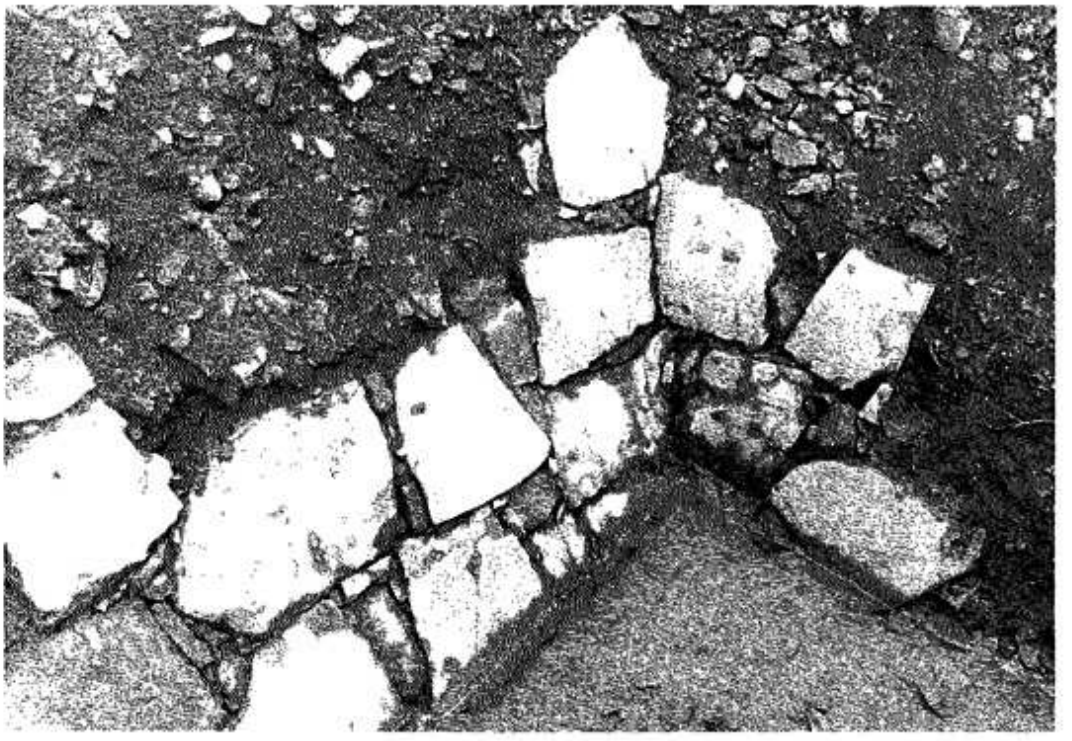
B－T7－a　石　垣（南西から）



B－T7－a　石　垣（北から）



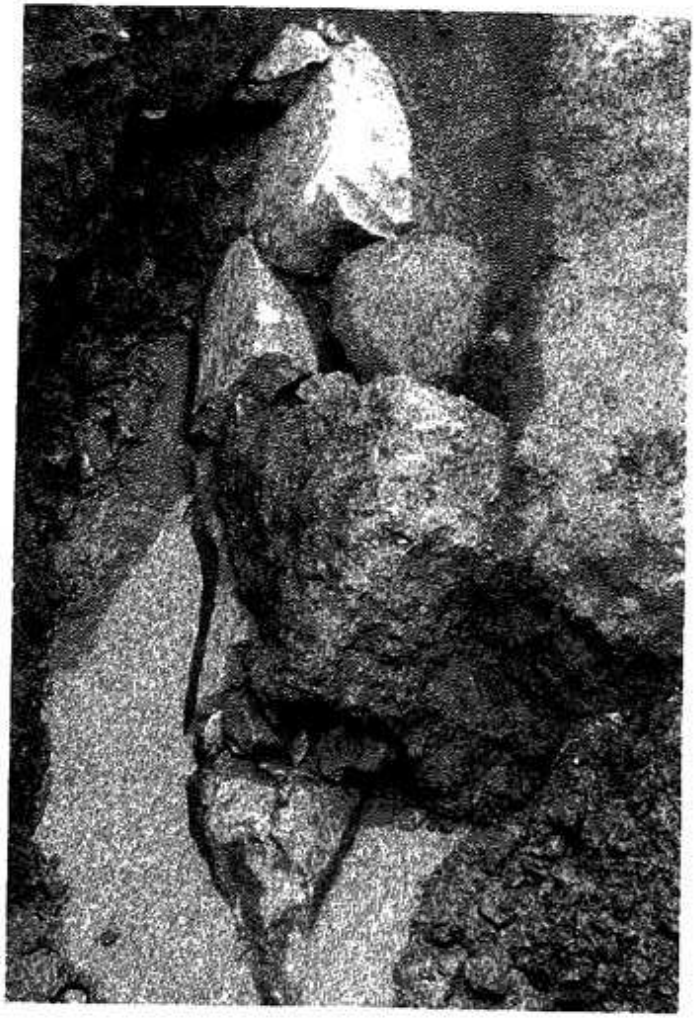
B－T7－a　石垣近景（西から）



入隅（MJ）出土状態（南西から）

出隅（▲K）出土状態（西から）

B－T7－b　石　垣（西から）



B－T7′ 石 垣（東から）

宇土城跡（城山）

宇土城跡（城山）調査概報(II)

宇土市埋蔵文化財調査報告書　第７集

1982年３月31日

発行　宇土市教育委員会

印刷　㈲　下　田　印　刷